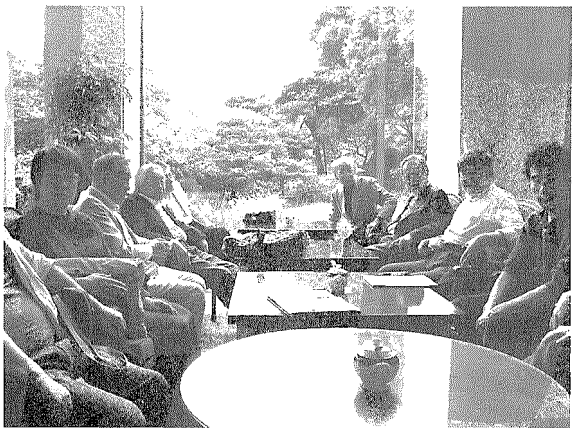
松下清雄を語る会

時間：2007年6月3日
場所：早稲田大学・大隈庭園内・「完之荘（かんしそう）」

出席者（発言順）
大金久展（1950年旧制政経学部3年在学中除籍，元海洋産業研究会常務理事）
野村勝美（1953年早稲田大学露文科卒業，元毎日新聞社）
松下忠夫（松下清雄・弟）
松下静枝（松下清雄・妻）
松下直子（松下清雄・妹）
長瀬　隆（1957年早稲田大学露文科卒業，作家，ロシア文学者）
柴田詔三（1952年早稲田大学露文科卒業，元都学連書記長，マガジンハウス）
池上明彦（新制作社）
生田あい（1967年立命館大学入学。現在，共産主義協議会「コム・未来」事務局長）
根本がん（水戸在住。市民活動家，反原子力茨城共同行動）
吉留昭弘（1937年鹿児島生まれ）
来栖宗孝（1920年中国吉林省延吉市に生まれ。1943年東京帝国大学経済学部卒。元東海大学文明研究所教授）
いいだもも（1926年，東京生まれ。1949年，東京大学法学部卒業。作家・批評家）

◇戦後の農民運動と農村の変容プロジェクト
今西　一（小樽商科大学）：司会
西川長夫（立命館大学）
番匠健一（立命館大学大学院）
倉本知明（立命館大学大学院）
安岡健一（京都大学大学院）
山根伸洋（成城大学）
伊藤淳史（京都大学）



＊本文中に出てくる不明な点は，（・・・）で記した。
＊発言者が不明な場合は，「―」とする。

大金　今日はどういう形で運営するか全く白紙でありまして，ぶっつけ本番であることをご容赦いただきたいと思います。司会を今西先生にお願いします。

今西　じゃあ大金さんのほうから自己紹介と，ご自身のやってこられたこと，松下さんの思い出を簡単に5，6分くらいお話し願えませんか？

大金　私は昭和20年に早稲田に入りました。昭和25年の10月に，いわゆるレッドパージ反対闘争に連座しまして，除籍処分を受けました。松下とは昭和25年の末に早稲田の細胞の指導部会で一緒になりましたが，これは翌年の5月に解散。これは日本共産党主流派から解散させられたという歴史があるんです。彼とはその当時からの古い付き合いです。

彼が水戸に，茨城に入って以降というのはしばらく関係が切れていましたけれども，東京に戻ってきてからは，小説の創作一本の生活に入ったのです。もっぱら電話でのやり取りが中心で，多少は彼の本の出版に協力したというくらいです。簡単ですが挨拶代わりに。

今西　ではまた後でいろいろお話をお伺いします。次の方どうぞ。

野村　野村と言います。昭和23年に早稲田の第二高等学院に入り，その時に松下さんと一緒になったんです。彼は長岡中学から海軍兵学校に入り，すぐ苦労して，それで終戦で，なんか山古志村の分教場の教員をやっていたそうなんです。話はとても上手くて，僕はすごく感動しました。

僕は北陸の福井なんです。彼は越後ですね。越の国ってのはずっと裏日本，福井から始まって新潟まで続いてるんですね。そういう風土的な親近感もあったんだろうと思うんです。けっこう仲良くやってたんですが，最近ぼけてきまして昔のことをケロッと全部忘れている。ほとんど具体的なことは何も覚えていないんですね。ただその分教場の話で，海のことを教えるのに，どう教えていいかわかんねえんだって言っていたのを覚えています。海なんて見たことねえんだからって。

それで露文に僕は行きまして，彼も露文に移ったんですね。最初はそのフランス語だったと思うんですけど，僕はロシア語専攻で，彼はフランス語。だけどあの頃は共産党の運動に従事して，第二外国語のクラスは50人ばかりきてたんですけども，ほとんど半分がガー・ペー（ゲハニスム・パルタイ＝共産党員）になっていました。そんなかで都会派のね，東京じゃ有名な青山高校，大金さんもそうだった？後で神山派にまとまるグループなんですけども，この人た

ちが演説がうまく，できる感じを受けましてね。松下とか僕とか田舎から来たものはなんとなく，引け目を感じたような時代でした。

だけど，とにかく反天皇制とか，人間革命みたいなこともやらねばならんのだっていう。ボリシェビキ的な人間て言うのかなーあの頃は？そういうつもりで，そのためにはロシア語もやらなきゃいかんし，労働者の祖国ソ連の勉強をしたいということで，そこに入ったんだろうと思うんです。だけど彼は1年くらいはクラスに出てきましたけれど，2年目からは全学連のほうに行っちゃったんだろうと思うんですね。ほとんどクラスに来なくなって，それで50年の細胞（＝共産党支部）が分裂したりなんかしたときには，どうしてたのか，僕はもうそのときには脱落しちゃっていたものですから詳しく知らないです。とにかく上部団体へ行ったときからは付き合いもなくなって，それで52，3年経ってしまってるわけですね。

去年『三つ目のアマンジャク』という本を出したときに，これは読まなくちゃいかんと思って，それで3千枚もあるような小説を読んだんですよ。僕はあの小説に感動しましてね。特に，フランソワ・ラブレーの「ガルガンチュア」のことをあとがきで書いてますけれども，ラブレーなんてのは僕ら早稲田にいた時に，渡辺一夫さんの翻訳書がでまして，これは実に立派な本だったですね。2冊か，3冊持ってるんですけど。当時，非常に評判になって，読みかけたんだけど全然わからない。さっぱり，何書いてるんだか。ちっとも面白くもくそもないから，放っぽりだしちゃったんですよ。彼が『三つ目のアマンジャク』で“遙かに仰ぎ見る高峰”と書いているので，引っぱりだしてきて読んだんですね。いま，ちくま文庫に入ってますけど，実におもしろい。よくあの16世紀ですか，あの頃あんなものを書いたっていうのは不思議な気がするんだけど。

それで感じたことを手紙に書いたんです。それで何十年かのブランクがあったんだけど，なんかブランクというのはまったくなかったみたいな感じになっていました。手紙も少しばかりやり取りしまして，去年の4月に町田まで会いに行ったんですね。そしたら，「おらぁもうあと3ヶ月だ」って宣告されてるって言うんだけども，声は大きいし，凄く元気がいいんですよね。3千枚も原稿書けるやつが，死ぬわけないなと思っていたら，こんなことになってやっぱり亡くなってしまったって。その時も，今度のやつはほんとに傑作だから，2千何百枚か書いたんだけど，削りに削って3百いくらにしたって生前は言ってましたけど。『草青火』も読みかけて，4章か5章くらいまでいって，あの病気をかかえながらこれを書いたのかと思ったら，もう読みきれなくなっちゃって，途中で投げ出したんですけど。今度こういった会があるっていうんで，もう一回あらためて最初から読み返したんです。そういう経過です。だから50年間のブランクについては，僕は何も知らない。会ったときにもうその辺のことは聞かなかったですね。ただ常東農民組合のことなんかは，何年かは山口武秀という，やくざみたいなおっさんのもとでやっていて，山口組だなんて言ってたとか，そんな話は聞きました。以上です。

今西　では，次にご親族の方，お名前だけ頂いて，後でご挨拶をしていただきます。自己紹介をお願いします。

松下忠夫　故人松下清雄のすぐ下の弟です。松下忠夫と言います。昭和27年に早稲田に入りまして，私のほうは31年に卒業しました。卒業する人間があんまり良くないって言うんで，早稲

田は中退のほうがえらいんだってのがあるみたいですけど，どうぞよろしくお願いします。

松下静枝　皆さん今日はありがとうございます。松下清雄の家内です。松下静枝でございます。どうぞよろしく。

松下直子　清雄には，3人妹がいますので，私は女の真ん中の松下直子と申します。旧姓でまだおります。

今西　ではまた御友人の方にもどります。

長瀬　早稲田大学の露文科では，私は後輩になります。学年はかなり下になりまして，松下とはまったく面識がありませんでした。長瀬隆と申します。若干の著述に従事しております。生まれは南樺太の大泊（コルサコフ）から引き揚げて，北海道は帯広，そして大学は早稲田に。面識はありませんので，あまり話すことはありません。本はもちろん全部読ませていただきました。

大金　じゃあ本のポイントを聞かせて下さい。

長瀬　たいへんな力作ではあるけれど，結論的に言うと僕は必ずしも成功している作品とは思えなかった。

今西　どういうところがですか？

長瀬　やはり主題が絞りきれていないと思いました。結末がやはりよろしくないんじゃないか。ときどき読みながらこれは凄いものになるんだなと思いながら読んでいって，終わりでやや少なからず裏切られた部分がある。これを話すにはちょっと簡単にはいきません。このあたりで。

今西　長瀬さんは運動を一緒にやられたことはないわけですか？

長瀬　私は時期が違いますけれど。ちょっと申し上げますと，今日来るはずで来なかった人に，早稲田大学でかの有名な1950年のレッドパージ反対闘争当時の全学委員長であって，その後，日本原水協で重要な場所をずっと占めてた吉田嘉清さんて人がいるわけですけど。彼を中心に1998年の暮れあたりから，『早稲田1950年 史料と証言』という全6冊の雑誌をですね，ここにいる池上君の会社（新制作社）で制作してもらって出しました。そのとき初めて僕は野村さんにも，大金さんにも，大金さんは前に会ってましたね，諸先輩にお会いしたんですが，名前を聞くだけでお会いしなかったのが松下さんでした。だから，全6冊にも執筆要請を，ずいぶん編集部としてもしたのですが，執筆なさらなかったという経緯があります。なぜしなかったかということも話せば長くなるんですが，ある全学連関係の事件に関係しているんですね。

今西　リンチ査問事件ですか？

長瀬　そうですね。もっとも良く知っていた人として，執筆なさるべきでした。というのは同時期に東京大学の国際派細胞が『一・九会文集』てのを出し始めました。相互に交流があるんですけど，その会合に私は出ていた関係で，東大側からの要望もあったんですね。それを終始断り続けたということで，皆さんかなり不信感を持っていたんですけれど，この大きな本に執筆しきったのであるとすればですね，よく理解できると言う面がある。まあそんなとこで，あんまり最初から喋るのはよくないので。

柴田　わたくし柴田と申します。早稲田に入ったのは大金くんと一緒で，戦争中の昭和20年に

入りまして，松下くんとは昭和24年にわたしが露文科へ移ったときに，たしか松下くん1年生で，文学部で一緒になって活動してました。主には昭和25年に，当時の全学連の下部組織の，都学連の書記を一緒にやってましてね。これはだいたい1年近く一緒にやってまして，その間いろんなことがありました。松下くん，僕が一番思い出すのは，さっき長瀬くんが言った東大の例の戸塚事件，査問事件に，まあ松下くんが火をつけた感じで始まった事件なんです。当時私は都学連の書記長でですね，委員長が高沢寅男です。

今西　社会党の元副委員長ですね？

柴田　えぇ。である日ね，当時早稲田の事務所がそこにあったんですが，早稲田の50年の10月問題で追っ払われて，東大にわたくしがずっと行って，東大の山上会議所の運動場の地下に都学連，全学連，東大自治会が一緒に同居して。で，その時ぼくが書記長で，高沢寅男が委員長で，高沢がある日から全然来なくなった。何でこないのか私もちょっと不思議になっていましたら，当時隣の部屋が全学連で，全学連の武井昭夫（てるお）委員長と，富田書記長に，ちょっとこいと呼ばれて，実はこうこうで高沢と戸塚と上田と，上田ってのは今の不破哲三ですね。3人はどうもスパイの疑いがあるというのを，そういう情報が入ったということで，この大事件が始まりましてね。

結局，いま僕は武井くんにもよく聞くんですがね。彼は今でもね，あれは火つけたのは早稲田の責任だということをね。本来，早稲田が解決すべき問題を，結局東大がひきかぶって，あの事件が契機で東大細胞が壊滅したんですよ。まあスパイというのは，あとで詳しく話しますがオマタという男で，これを新宿の飲み屋で，早稲田の後に共産党の代議士になる津金佑近くんがやってた店にそのオマタという男が現れて，まわりに一緒にいた早稲田の志村豊寿くんらに，東大には戸塚，高沢，上田というスパイがいるということを漏らしたんですよね。それで松下が，我々のいる東大の全学連に飛んできたんですよ。武井に実は3人はスパイであるということから，事件は始まりましてね。それから紆余曲折があって，結局まあスパイじゃなかったんですよ。スパイじゃなかったんですが。オマタという男については，いろいろ早稲田でも調べたんですよ。自宅の近所を見張ったりいろいろ調べたんですが，正体が結局わからなかったんですよ。だから早稲田としては本当に東大に申し訳ないと思っているんです。今でも思ってるんです。

当時まだ特審局なんてのはなくてね。当時の学生運動を取り締まっていたのは，警視庁なんですよ。なぜ警視庁かっていいますとね，実は昭和26年にハンガリーで国際学連の大会があるんで，日本から誰か送ろうっていうんで，僕と武井くんと富田くんなんかと相談して人選をしてた段階で，当時たまたまうちの妹が電報通信に勤めてましてね。電通の入り口でね捕まったんですよ。警視庁の特高刑事に。完全にあの頃は特高課がかかわってて，特高刑事に捕まって，そこでいろいろとお宅のお兄さんは外国へ行くような噂が出てきているけど，そういう事実はあるのかどうか，という調べを受けましてね。だから，オマタってのは他は考えられないですよね。もしスパイだったら警視庁じゃないかという，疑いがあるんですが。警視庁のスパイがね，東大にスパイが3人いるなんて事をばらすわけないわけだから，これは僕は警視庁じゃなかったと思っています。その正体が依然として不明で，僕は松下くんはオマタの正体を最終的に知ったんじゃないかと思ってるんですよ。知ったんだけど，彼はこの秘密は墓場まで持っていくと。

ということで，これは謎になってるんですが。そういったことが，松下くんとの関係では，一番思い出深いことですね。で，彼は常東に行ってからは僕らは全然関係なくなりましたし，以後のことはあまり知りません。以上です。

池上　新制作社の池上と申します。松下さんの最後の作品になりました『草青火』，そして長瀬さんからお話があった『早稲田1950年 史料と証言』とかの制作を担当させていただきました。よろしくお願いします。

今西　松下さんの本はいいださんの紹介だったんですか？

池上　『草青火』ですか？直接的には大金さんからです。

今西　ああ，大金さんのご紹介ですか。

生田　生田あいと申します。まず松下さんのお名前は，大金さんとか，先ほどの早稲田細胞の話が出ましたが，私はその早稲田細胞から出た寺尾五郎というものの弟子でございまして，寺尾さんと一緒に1980年代のなかばに，共産党に代わる新しい党を作ろうということで，共産主義者の建党協議会というものを作って，その事務局長をして，寺尾さんが代表だったものですから，そのときにいろいろお名前のリストがあがったときに，松下清雄さんのお名前も出ました。でも，いろいろ後から聞いたところでは，いまお話になってたリンチ事件とかいろいろあって，松下さんがそこは「うん」とおっしゃらなかったというお話だったと思います。

その後，直接お会いしましたのは，寺尾五郎さんも亡くなって，そのあと現在その系譜のなかから，「協同未来」という一つの政治的アソシエーション，政治組織を作っておりまして，現在事務局長をしてて，いいだももさん等々と一緒にやっています。いいだももさんの紹介で松下さんとお会いしました。それ以来松下さんが「協同未来」の協力者ということで，何度か会議にいらしたんだけど，体が悪くて気分が悪くなってお帰りになったということがありました。

そして，松下さんが早稲田で，いろいろなことがあって，常東に行かれて，農民運動を担ってた先輩なんだと，コミュニストとしての先輩なんだと知りました。わたしが事務局長で頑張っていたもんですから，会議にはしょっちゅう来れなかったんですが，いつも松下さんらしいもの凄く大きなきちんとした字で，何度もお手紙を頂きました。あの二冊の本の『三つ目のアマンジャク』のときは，ご紹介を私たちの機関紙『未来』に，いいだももさんに書評を書いていただいて載せて，お亡くなりになる去年の8月ごろでした。その頃に病床からだと思いますが，丁寧なお手紙を頂いて，あたしなんか後輩ですから，あとを頑張れよということだったんだと思いますけど，励まされていたという感じでした。

お亡くなりになってこの本が出て，今年になってから，いいだももさんが三回にわたって，松下さんがお亡くなりになったのを契機に，松下さんを中心とする，今日ここにおいでになる皆さんにとっての常東農民運動の経過等々を，『未来』の誌上でずっと連載をしてきました。私が編集長でもありますから，そのことを整理をしながらというようなことが，ございました。いろんな昔のことは，わたくしは良くわかりませんが，松下さんは一人のコミュニストとして，一番最後のところで，表現形式は変わったんだというふうに思いますけど，そして私たちの組織の運動に対しても協力者という形でしたけど励ましていただいて，最後まで一人のコミュニストとしての志を，いろんな意味も込めて貫かれたんだなというふうに思って，松下さんに頂

いたお手紙は大事に自分の机にとってあるんですけど。そういういきさつで松下さんとは，本当に最後の晩年，お顔を見て，お話を聞いたりしてきました。以上です。

根本　あのー茨城から参りました根本がんと申します。あのー松下さんというよりも，渡辺さんて，つまり「なべさん」といったほうが私にとっては通りがいいんですな。奥さんもご存知だと思うんですけどね。両方とも私は若いときから知っていまして，やはり渡辺さんの農民闘争に対する思い入れというか，それはいま思い出してもなかなか大変なものがあるし，そして何よりもですね，わたくしが感心いたしましたのは，さつま芋一本，麦の穂一つでも運動が組織できるっていうことを言っていただいたんですよね。いまでも私はいろいろと運動するなかで，教えになっていると思います。いろいろな所で，さまざまな問題ってのを教えられながら，とにかく若輩者ですから，やっとこさっとここういうふうにやってこられたなっていうふうに思っております。難しい話はともかく，これからいろいろと話が出てくると思いますけど，とりあえず自己紹介ということで。

今西　根本さんは常東農民運動をおやりになっていたんですか？

根本　常東とは少しかかわってます。

今西　松下さんは常東をやってから茨城へ行かれたんですよね？[1]

根本　そうです。そのころ一柳茂次さんですとか，いろんな人が入り込んでいまして。だけど渡辺さんが茨城農民同盟を作って分かれていった。

今西　では詳しい経緯は後でお願いします。

吉留　いや，声が聞こえないから立ってやります。わたくし吉留といいまして，直接お話聞いたことも，お会いしたこともないんですが，たまたま寺尾五郎さんと，それから早稲田大学で同期だったと思いますが，西田理さん，もう亡くなられましたけど。この二人の先輩に，1970年の頃お会いしまして，いまから30何年前ですけど。非常にこの先輩方にお世話になりまして。その後いいだももさんとか，大金さんともお知り合いになって。今度この本が出まして，お亡くなりになって初めて知ったような次第で，直接の関係はないんですけど，自分が影響を受けたといいますか，尊敬してる先輩たちの同級生といいますか，一緒に活動された方ということで，非常に親近感を持ってまして，今度の最後に出されました本も読ませていただきました。今日は，先輩たちの話も聞けるかなということで参った次第です。

長瀬　いまおっしゃった西田さんてのは，中国から帰ってきた人ですか？

吉留　そうですね。

長瀬　西田さんは茨城と関係があるのですか？

吉留　茨城は関係ないと思います。西田さんは早稲田大学で寺尾五郎さんとご一緒でですね，その後は吉田嘉清さんたちと一緒に平和運動をやられておりましてね。1960年代に，日本共産党を除名されて，中国派でですね，私も同じようなことで当時中国派の方に流れていったんですけど，そういうことで寺尾五郎さんとか，西田さんとは知り合いなったと。だから自分にとっては寺尾五郎とか西田さんてのは非常に忘れがたい人物ですね。

長瀬　わかりました。では。

来栖　わたくし来栖宗孝と申します。これまで皆さまのお話をお伺いして，なんと申しましょ

うか，夢魔のようなものが，半世紀前のことがよみがえってまいりました。松下さん，これはお隣においでになるいいだももさんと，当時は渡辺武夫さんですね。いいださんの方が一緒に活動され，一緒に党から除名されたということで，一番深くかかわりをお持ちだろうと思います。私は少し歳を取ってるもので，いろんな運動にかかわりながら同時に何か眺めているというような感じがございまして。長くなるから，一つだけ申し上げます。東大の全学連の連中，早稲田の連中も，代々木から除名されていよいよ困って，常東農民組合の山口武秀天皇のところへオルグとして行くわけですね。その時に行ったのが，最初が安東仁兵衛です。それから東大では，いま労働運動研究の代表理事をされている柴山健太郎くん。この方は佐久間弘くんといって，武秀さんのところで農村オルグをやっとる。早稲田からは，今の松下さんがいらっしゃってる。それからシベリア抑留の兵隊さんで帰ってきて，いろんな苦労されて，やはり常東のオルグになられた柴田さん。この方は去年亡くなられました。それから非常に面白い経歴ですが，満州の新京，現在の長春でございますね。そこに満州国時代につくられました国策大学で建国大学というものがありますが，そこの七期生の田山実というのがおりまして，戦争に負けてもちろん建国大学は解散してしまう。さんざんソビエトの占領下で苦労して，引き揚げてきて，頭のいい方なものですから旧制水戸高校に入りまして，私のちょうど七期後くらいです。この田山くんも常東のオルグに入られた。それから下山田虎之介さんもそうですし，一番の出世頭は現在の鹿島の町長をされている立命館大学から来た方がですね，五十里（いかり）さんです。というような，当時は山口武秀さんの下に，いまで言いますと梁山泊の豪傑どもが集まっておられました。

私などはお会いして，ひと口に申しますと狼のようだなという感じですね。目がぎらぎらとしてて，隙あらば噛みつこうと。何をそんなに，小作争議で地主と喧嘩するのはいいけれど，関係のないひとのうちまで来てなおギラギラさせて喧嘩腰で喧嘩を売ってくるのはどうかいなと思ってたんですが，これは山口武秀流儀でありました。まさに梁山泊の豪傑連ということですね。

先ほど東大細胞のリンチ事件で「一・九会」が雑誌を六回まで出してストップしておりますが，わたくし6冊とも持っております。そのしょっぱなを切ったのが早稲田のオマタというスパイとされている人で，そういう話を聞きますと，本当に夢魔に取りつかれた感じがいたします。

話せば長くなりますから，これでやめますけど，特に最後の『草青火』という本ですね。これも私は一生懸命に読んでまいりました。それからもう一つ，こんなに分厚い『三つ目のアマンジャク』も拝見して，大変面白かった。フランソワ・ラブレーの『ガルガンチュア』云々という，向こうの本にも書いてある。これにも書いてあるけど，どうもガルガンチュア的豪傑性はないんですね。この本は。なぜかっていうと，松下さんはあまりにも真面目すぎたのではないかと，この小説についてもですね。そのためにガルガンチュアになり損ねたのではないかと思います。その話につきましては，また後ほど折がありましたら話させていただきます，失礼いたしました。

いいだ　いいだももと申します。遅れてすいません。大金さんからもらった地図を忘れまして。私は，松下は早稲田大学のキャップ[2)]ですから，ご縁では寺尾五郎，大金久展，吉田嘉清，これは早稲田のコミュニストの伝統をつくった方々と，いろんな戦後の運動のなかで付き合いが

深まって，一緒に反代々木の反スターリンの運動のなかでということになります。先ほど茨城の水戸の根本がんさんからお話があったように，私たちにとっては松下さんというより「なべさん」なんですよね。ご周知のように，渡辺武夫ってのは彼のパーティネームていうか，党名であって，私は彼と茨城の共産党の県の常任委員会というのを指導しておりましたけど，その時も彼は渡辺武夫という党名を使っておったんで，私どもは「なべさん，なべさん」と。ついでに根本がんさんてのは，今は茨城の大長老になって，知る人ぞ知る茨城の反スターリン主義の活動家たちを束ねている大人物なんですけど。私が知り合ってる頃，私が茨城の県の常任委員会を率いてる頃は，彼は民青の県委員長をやっておりまして，それで「宮本綱領」に反対して，二人とも除名になったんですよ。

別に今日僕は反代々木の宣伝をしたいためにきたんじゃありませんけど。まあ，その発端と終わりのところに松下くんはたまたまいて，これは歴史の宿命がかかわっておりまして。発端というのは例の，東大細胞と早稲田細胞は当時の，戦後の学生の勢力では最大で，ご承知のようにそれぞれ200名以上の党員を擁している大勢力であった。そんとき有名な，東大の武井昭夫くんと安東仁兵衛が組織したっちゃおかしいけど，スターリン主義時代ですからやっぱ組織なんですけど，例のスパイを摘発して査問リンチをやった。戦前の共産党の最後を飾った，飾ったってのも変な言い方になりますけれども，戦前の党を壊滅させちゃった，宮本と袴田のリンチ共産党殺人事件のほんと二の舞なんですよね。

二の舞というのは，宮顕ていうのはきちっとした自己批判を発表してませんけど，あれには非常に懲りちゃってるもんで，武井くんらの国際派は当時，宮顕の直接指導下に入りましたから，東大で査問リンチが開始されたときに宮顕が東大まで来てるんですよね。それが指導はしていったって。その指導は私は間違ってないと思いますけど，絶対殺しちゃならないという当然の指導があって。これで，武井くんと安東くんは結局スパイで摘発されたものを殺さないで終わったんで，今日あるを得てるんですね。

私が言いたいのは，発端を作ったのが渡辺くんの，松下くんの指導しておった早稲田細胞なんですよね。で，早稲田細胞が早稲田のキャンパスに侵入してきたスパイを見事に捕捉して捕まえたわけですよね。スパイであると自白さした。ところが，職業的な特高のスパイってのは非常に熟達した，ある意味での活動家でありますから，そん時に巻き添えにして党内を混乱させるために，あることないこと話たんですよね。あることないことのなかに，本富士署ってのが東大の前にありますけど，本富士署から派遣されてるスパイがこれこれ云々ということで，いま共産党の大御所になっている不破哲三くんと戸塚秀夫くんの名前を出したんですよね。そのことを捨て置けないから，これは発端ですよ，だから僕は松下くんに責任はないと思うけど，国際派の総キャップであった，全学連の中央グループの指導者であった，武井くんのところに上申に及んだわけですよね。松下くんのかかわりはそれまでです。にもかかわらず，それから60年間，そのことに苦しみぬいたわけですから。非常に大切なことだと思いますけど。

それで武井くんは，不破と戸塚に対する監禁査問を始めたんですね。これは正直言ってリンチ査問ですよ。私はたまたま戸塚くんにつけられた，古賀の細胞にいた小島晋治くん[3]ていう有名な男ですけど，大学教授になった。小島くんから話を逐一聞いてましたから，これはなんらかの錯誤ないしはでっち上げによる，誤ったリンチ査問事件である，なるべく早く収拾した

ほうがいいと考えていたもんですから，安東くんにもその旨申し上げた。安東くんは，武井くんは絶対そういうことについては何一つ明らかにしないんで，それはある種の昔のもののふの心得なんだけど，今の時代には全部公開されなきゃならないわけですから，それは彼は生涯しょったまま墓に入るつもりでしょうけど，それは僕は大きな誤りだと信じてます。

安東くんはそのへん，武井くんの制止を押し切って例の『日本共産党私記』という本を出したわけですよね。僕はそれは安東くんの公開性でやる原則が正しいと思うんだけど。そこで安東くんは，自分は最初は信じてと思って武井とリンチをやってたんだけど，ある時これは絶対スパイじゃないという確信を持って，それで自分は制止に努力をしたというように言ってる。安東くんも亡くなっちゃったけど，あそこで書き残したことがすべてを語っている。それは安東くんの功績である。当時の日本共産党のスターリン主義的な気風っていうものを救ったというふうに思うんですよね。

それは，そういうことなんだけれども，まあ松下くんは大金さんや吉田さんが一番ご承知のとおり，それから55年，早稲田のあらゆる懐メロを含めた旧共産党関係者の集まりには顔を出さなかったんですよね。55年間顔を出さない。それはひとえに東大における全学連のリンチ査問事件の発端を作ったのは自分の細胞であり，キャップである自分の責任だという政治責任ですよね。さきほどがんちゃんや来栖さんの言った，真面目極まる松下くんの性格から出るある種の性格悲劇なのであって，そこまで人間てのは背負い込めないですよね。政治活動やっている以上は誤りは避けられないわけだから。避けれない過ちを淡白に自己批判できるかっていうのは真のボリシェビキ的な性格だと僕は思ってますから。ちょっとこの世では背負い込みきれないものだと思うんですよね。彼はそこのところ最後まで背負ってったわけですね。

そのついででもう一つ最後のところを言いますと，私はリンチ査問事件の経過は明らかにしなければ公党として申し訳ないと勝手に考えているもんで，宮顕や不破が背負ってない分まで勝手に自分に背負い込んでやってますから，松下くんがいよいよ死の床についてから2回ばかり奥さんご承知のように，松下くんを慰問すると称して行きまして，正直それだけは言い残していってもらわないと公党として後世の体制に対して責任を果たさないから，それはどうなんだろうということを二度ばかりね，これは僕もね，簡単に言えばいまわの際ですからね。そのときにそういうことを言うっていうのもあれですけれど，大金さんにもご同行願って，問い詰めたことがあって，大金さんの心証は非常に彼直感が正しいから，やっぱり松下はそれ関係していると。自分は関係していないってずっと言って早稲田の集まりにも一切出てこないと言ったら，それはやっぱり責任感，苦しみからそうなっているんだというふうに言われて。最後に結局，僕自身持っていますけれど彼はしーちゃん，松下さんの奥さんを通してそれについての2枚くらいの便箋にしたためた文章を僕に預けたんですよね。それを読んでそれは公にすべきものでも，宮顕じゃないから私は自分のポケットにしまっていますけれども。それによるとさっき私が言ったような仔細がそこには記されているわけですね。これがひとつです。

二番目の問題は彼が全学連の国際派に行って，当時の宮顕の政治ですから，反党分子スパイ，最後はスパイということで除名になるわけですよ。それは武井くんも安東くんも松下くんも大金さんも吉田さんもみんなそういう累をかぶったわけですから，日本のスターリン闘争っていうのは，いかに悲惨なものであるかってことの一つの例証なんですけれど。そのあと来栖さん

やがんちゃんが言われた通り，山口武秀の常東に拾われて，常東に行ったんですよね。私は当時，共産党の茨城の指導部にいったわけですから，そこにいますと私は結局茨城の党活動史を総括してみると山口武秀，梅本克己，遠坂良一の三人と結局全部行動をともにしたんですよね。三人が三人とも，私を入れれば四人が四人とも全部名誉ある反党分子です。それで結局全部除名されていったということになって，これもまったく僕は偶然じゃないと思うんですけど。私が茨城指導部やったときには山口武秀はマーフィー[4]の手先だってことでさかんに中央から指導が来るんだけれど，私はそんなことは受け付けませんから。面従腹背ですけど，知らん顔して山口のとことは付き合って，山口武秀のところにはまた若いのがいっぱいいまして，これは独自の党活動を進めておって。

山口とはみごとな男ですよ。戦前における彼の18歳から始まっている党活動ってのは，常に大衆運動と結合してみごとなもので，大衆運動と結合しているから宮顕的なリンチ査問路線的なコースとは全然違ったコースを歩むわけで，唯一その時でも山口の名誉のために言っておきますけれど，彼は常東という偉大なる農民運動を率いていただけではなくて，そのなかに党を作っておりまして，例えば後に江戸川の区会議員を勤めた雁金という活動家がいますけれど，これはその時に彼が細胞に組織した一員なんです。そういう形で彼は細胞をくまなく作っておりました。それは僕は党のレベルでも宮顕に対する形では完全に非合法な形になりますけれども，そういうことをやっておって。他に梅本克己さんとも遠坂良一さんとも全くそういう形を持ってやっておって，梅本さんとは私に言わせれば元私の党ですけれど，水戸唯物論研究会という有名な研究会をやって，大井正さんの東京唯研と，名古屋の竹内［良知］さんの唯研と，大阪の森［信成］さんの唯研と，これで唯研の多数派を作ってマルクス主義の著作活動をやっていたという因縁があるんです。

そこで松下の話に戻りますと，そこで常東へ彼が来て，常東で山口と一緒に，これは何度も繰り返して言いますが，常東の偉大なる農民運動に言論化されていなくてもそのことの評価だけはあるのだけれど，それは党活動と裏表になっているんですよ。それはだからナベさんの意識においてもそうだし，山口武秀の意識においてもそうなんですよ。そういうもので展開されるのだったらぼくは大いに証言に力を入れたいと思う。そういう形でやっていたんですね。それで山口というのは僕の義兄弟で肝胆相照らしたコミュニストの同志ですけれども，彼は彼でやっぱり山口天皇なんですよね。僕はどういうわけか山口天皇と馬が合うっていうのは，僕も茨城ではいいだ天皇ですから，天皇同士で馬が合ったと思うんですが，それは昔のスターリン主義とコミンテルンのなかで育ってきた我々活動家のひとつの悪い作風ですよ。だから何を言いたいかというと，常東の運動を一緒にやって身を埋め込んで格闘する，私も大いに一緒にやって，常東便といって茨城県庁に週に一回バス二台を動員して補助金獲得闘争をやる。それを僕は大いに補助金獲得闘争をやったんですけれども，私の手前勝手な自慢を言うと私は当時茨城の農民運動は党活動と共にやっていまして，私は茨城の西部地区委員長をやっていたんです。そこでは農民運動の会があって，一地区として前例の無いことですけれど，3人共産党の代議士が西部地区から出ていたんです。池田峰雄というのと，労農党の池田恒雄というのと，水海道にいた菊池重作[5]という，当時共産党の代議士でのちに社会党の代議士なんですけれど，三人の代表を抱えるくらいの盛大なる農民運動をしたんですよね。

松下ももちろんそういう盛大なる農民運動を山口と一緒にやっていたのですけれど，やっぱり天皇だから，山口と完全に農民運動上の意見で大衝突になった。そのこともはっきり書かれていませんけど，渡辺武夫の名前で発表した『戦後農民運動史』という大月書店からの本があって，これいい本なのでお読みいただくとわかりますけれど，彼は山口と同じように農産物の価格闘争を中心としたいわゆる反独占農民運動の先駆者であって，それは当時伊藤律に指導されていた党農民部，私の旧同志ですけれど，下山田虎之介さんとか，私とか，党の全国の農民グループを作っておりましたので，そのなかでしょっちゅう党中党でもって勝手にそういう反独占の運動を我々は地元で推進しておったのですけれども。そういう同じように推進しているなかでも，ナベさんの『戦後農民運動史』読むと山口天皇路線とは特に官僚主義的思想の問題で路線がちょっと違うんですよね。それで結局ナベさんは常東を除名になったんです。これが非常に大事な点なんですよね。

それで結局それから彼は茨城町という，当時町ですけれど，そこへ来て，そこで独自の農民運動をして，下山田虎之介を委員長にして自分は書記長になって，茨城農民同盟というのをやったんですよ。これも大衆的で非常にいい運動でしたね。どれだけ彼が本当に不世出の運動家だと思うのは，そこへ来て一年たったくらいですか，彼はそこの茨城町の町会議員に当選したんです。これね僕みたいに田舎で運動をしたものだとよくわかりますけれどね，差別するわけではないけれども，そういうことやられたことのない方には想像のつかないことだと思いますけど。20歳そこそこの大学出のあんちゃんがね，田舎では大学出ってのは村民から非常に尊敬されますけれど，同時にそれは世間を知らないものだという評価だってことですからね。なかなかしっくり溶け込んで自分の町会を任せようとは思わないし，町会議員になれるってことはほぼもう稀有なことなんですね。全国で例の無いことと思います。それで町会議員を彼はやって，運動やっていたんですね。僕はだから茨城の農地解放運動を，とことん山口と義兄弟になってやったときから含めると30年，松下がここにきて茨城町の町会議員やってからは20年，それから20年やったんですよ。それで我々は，ある種の負け惜しみや自負心を含めて言うと，そこのところは日本の農地解放運動の先頭に立ってやりぬいたんだと思いますよ。

私は茨城の当時の運動というのは山口武秀と共に世界一の運動であると本当に自慢して自負しておりましたからね。それをやりぬいたんですよ。やりぬいたなかで，突拍子もない言い方ですが，私はコミンテルンの32テーゼは全部インチキだということが身をもってわかったんです。そこから僕の反スターリン主義は始まるわけです。つまり，彼が天皇制の基礎は半封建的な農村土壌にあるのだから，それを地面でぶったおせば天皇制は倒れると言ったんです。僕はそれを信じて戦争中を生きてきましたし，だからその通り戦後すぐ農民運動に飛び込んでやったわけじゃないですか。それで，自分としては完全に農村におけるその根を断ち切ったわけですよ。にもかかわらず天皇制は打倒されないわけです。

フロントの中央では伊藤律が頑張っている，と。山村に農民運動をやりにいったわけですからね。僕らは当時，彼ら山地派（シェーラ派）に対して，平原派（リヤード派）と言って，キューバ革命と逆の立場を山口くんがとって，平原派というふうに称していました。志田重男と椎野悦郎が小河内に山村工作隊をやって，あれは死人も出ましたからね。学生細胞を延1万名くらい動員したんですよ。われわれはその時，農民たちとともに3人の代議士を出すくらい平原で

東西を疾駆しておったわけです。それで蓋を開けてみたら小河内では，伊藤律の共産党の票は7票しか入らなかったんです。私はこういうところで勝負があったと見ているわけです。そういう総括を共産党が60年もやっていないってことは怠慢も極まりない。まったく我田引水もいいとこだと思ってますよ。

そういうなかで松下くんはやっていたんですけれども。ほんとに両方ともやれと言われたときにやれなかったということは，私どもの弱さかもしれないけれども，やっぱりやれと言われてもやらないのは，私の経験的な言い方でいうと，私は松下くんについては地元農民組合の百姓たちには銅像を建てろと言っていたんです。私は別に銅像を建てたいと思わないけれども，本当にその時はそう思っていたに違いないと思います。見ていると，農地解放でみんな良くなった百姓はまず，これは不思議なものですけど農民の美学なんですね，必ず池を作って大きい鯉を飼うんですよ。茨城行ってごらんなさいよ。どこの家にも大きい池があって，みんな鯉がいるんですよ。

長瀬　田中角栄と同じ。

いいだ　田中角栄とおんなじだよ。田中角栄なんだよほんとに，日本の農民ってのはみんな。だから，われわれは革命のためにやってんだから。ここで一服して金が入って，鯉を買おうって奴はもう一度別の回路でもって，将来に向かって何十年かたって，苦労辛酸の上にまた結び付けなきゃいけない，けどもうなくなっちゃうんだよね。

それで，そういう形で別れた。だって最初，そのように銅像を建てたいと言えば泊めてくれて，飯を三食食べさせてくれた人が，だんだん食い物が出なくなってお茶だけが出るようになるんですよ。食い物が出るうちには，われわれが手の空いたときに百姓のところへ行くと，紙皿に入れた粗糖（ザラメ）をざっと入れてくれるんです。オレは東京の江戸っ子だからね，そんなもの舐めるようなぶざまなことしたくないけど，党のためだからね，ガッとやるわけよ。ところがそれが出なくなっちゃうんだよ。で，お茶だけです。お茶もだんだんね，ぷーんと匂ってくるんだよ，あれ一ヶ月も土瓶のなかに入れておくと。でその濁ったお茶を飲む。次，今度はお茶も出なくなります。これは松下と僕が30年，20年やって培った百姓との付き合いですよ。僕は百姓とともに世界変えようと思ってるから，百姓を恨む気は全然ないですけど。リアルにそうで，また会うときにはまた別のお互いに苦労しなきゃ，苦労しなきゃ人間が解放されるなんて思わないですからね。そうなるんだと思って付き合うんですよ。だから，語るに飽きて，東京に来たんですよ。

東京に来たときの話をもう一つだけして終わりにします。松下はその時にね，つまり茨城の県常任委員会ってのは日本最強の反党分子の集まりです。渡辺武夫と山田光雄（小山田）と私という三人が常任委員会を牛耳って，勝手なことをやって宮顕を悩ましたわけだから。そこで除名になってきて，僕はあくまでも一生オルグですからね。党活動を続けようと思って，茨城では百姓は飯食わしてくれなくなったから，加藤のやつがきて東京へ行けと。東京ではまたひと花咲かせるぞと思って来て，すぐに反党分子としては最大のことをたくさんやったんですよ。だから，そういう形のなかで別れたんですけど，松下はその時にしーちゃんと結婚することになったんです。ついでに言うと，しーちゃんは僕が茨城で寝てるときに出会った日本患者同盟の非常に優れた活動家でした。その縁で，しーちゃんは僕が茨城町の町会議員をやっていた松

下を紹介して，それからご縁ができて結婚したんですよ。松下の悪口を言うわけじゃないけど，松下は僕と全然正反対ですよ。美少女好みなんですよ。美学なんだよね。オレなんか全然そういうところはないんです。時々いますよ，えらい人で美少女好み。だからなかなか結婚は難しかったんですけど，どういうわけかしーちゃんとは非常にうまが合って，本当に肝胆相照らすようになったんですよ。

そのときに彼は，「ももさん悪いけど，自分は実は文学青年で，一生かかって書きたいことがあるんだ」と，「だから党活動はご遠慮して，シンパにだけしていただいて，そこは書かせてもらいたい」って言うんで。そこは，人間一生一回しかないですからね，「わかった。じゃあ，いいものを書いてくれっ」と言って別れたんですよ。その結果が，東京へ来てから20数年になりますか。彼が営々として書いた，みなさんにお読みいただいた二つの大著になったんですよ。僕はあれは正直言って，跋文も書いたし帯も書きましたけど，誰ひとり買うものいないと思いますよ。どうですか，しーちゃん，その頃あんまり売れなかったでしょう。それで僕はしーちゃんと何度も相談して，しーちゃんの弟さんもとっても気を使ってくれたから，何とか売らないといけないと思っていました。大金さんも頑張ってね，僕らの党の控室で書評を書いてくれたんだよ。これで狭い党内では弾みはつきましたよね。僕自身はしーちゃんに校閲してもらいましたけど，長い書評を書いてね。だって大金と僕しか書評書くやついないんだから。中島がいるのか。中島誠は義によって生きてるえらい男なんですよ。

それで結局，僕もしーちゃんに見てもらって書いて，それを今話をした生田さんが拾ってくれて，今でもまだ連載終わんないけど，延々と連載してくれるんですよ。それが皆さんのお目にとまって，だんだん少しずつ変なもの書いているのがいて，それを本当は意義があるんだって言ってる変な男がいて，もしかすると馬鹿当たりがあるかもしれないから読んでみろってのがあって，いくらか動いてると。それと一緒だと思うんですよね。

そしたら今度はしーちゃんと弟さんの方から便りが来て，立命館と小樽でこの本を非常にかってくださって，長いものを書いてくださってる方がいて，今度東京で集まりをやってくださるってんで，楽しみにしてくださいと，いうんで長々しいことになりましたけど，ここにまかり出たわけです。

今西　小樽商科大学の今西一と申します。やってることは近代の，明治の初めの頃の文明開化期のことをやっています。もともと部落問題や民衆運動史などをやっていました。20代くらいの時，京都府の農地改革史の仕事でやらされまして，それが，70年代の初めぐらいですから，ちょうど戦後の農地改革を京都でやった人たちですね，泉隆さんなどいろんな人たちがいますが，そういう人たちの聞き取りに何年か京都府下を回ったことがありました。少し農地改革とか戦前の農民運動についての知識があるということで。西川先生から，松下さんのお手紙などを拝見して，西川先生は農民運動や戦後の農地改革とか，そういうのはあまり詳しくないのでお手伝いをということになりました。

松下さんの『三つ目のアマンジャク』を読んで私は感動して，これからできれば関西の若い人たちに研究会をやってもらいたいと思っています。松下さんは戦後の農民運動，農村社会についてルポも書いておられるし，いろんな記録も残しておられるし，文学もあります。そうい

うことも非常に関心があります。

それから，もともと農民運動史に関心がありましたので，私も常東農民運動に関心があります。いわゆる反独占農民闘争をどう捉えるのか，戦後の農地改革で地主制の再編という共産党の伊藤律らの農業綱領がそうですし，岩波の『日本資本主義講座』戦後版でも封建制の復活再編論みたいなのが出てきて，それに対して一番戦闘的に戦ったのが常東の運動ですね。

そこから出てきた一柳茂次さんとか，栗原百寿さんとか，そういう人たちの農業理論はわれわれにとっては学生時代一番勉強させられたものです。講座派的なマルクス主義の農業理論が非常に強かった中で，一柳さんとかあるいは栗原さんのような，32年テーゼを筆頭するような戦前の半封建的なものを過大評価することへの非常に厳しい批判に共感しました。戦後の独占による再編成をまったく無視したものを批判することもそうですが，栗原さんの『農業問題入門』などは，われわれは必読文献みたいな形で読んだ本の一つです。そういうものを学生時代に勉強していました。ですから常東運動に，どういうふうに栗原さんたちが関わったかっていうことも，私は非常に興味のある問題です。そのあと常東運動を総括した農民運動史研究の雑誌も出しておられるし，それから大島清さんとかいろんな人たちも運動に参加しているわけですから，そういう経過についてもあとで教えていただければと思います。ということで，今回はいろいろ勉強させていただきたいと思います。また今後も関西の若い人たちと一緒に研究していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

西川　西川長夫です。今日はこういう集まりをもっていただいてありがとうございます。僕は現在は立命館大学の先端総合学術研究科という大学院で働いています。その前には文学部と国際関係学部にいて，それから今の籍に変わりました。

定年はだいぶ前に過ぎていまして，立命は65歳定年なんですが，今73の誕生日を迎えたとこです。おそらく立命館で最年長の現役です。それは僕にとっては非常に皮肉で面白いことです。立命館の校風に合わなくて，色々問題を起こしたりしていましたが，そういう人間が最後まで働いています。

松下さんとの出会いは本当に突然のことなのですが，今日コピーをもってきたんですけども，突然長いお手紙をいただきまして。47枚かな，便箋にびっしり書かれて，松下さんがこれを書いたきっかけは僕の『スタンダールの遺書』という本がありまして，それを偶然お読みになって書いてくださった。松下さんの生い立ちから，占領中の時代，共産党の時代，また，農民運動の時代。ずっと個人史のようなことが書かれています。そして最後にそういう運動のなかで，大きな悩みをもっていて，心の空虚みたいなものにどうやって耐えていくかという，それが文学のテーマとしてあるといったことが書かれていました。

僕まったく初めての方にこういうお手紙をいただいて，非常に困ってしまいました。僕の本を読んで，こういうことを書いて送ってくださったことに関しては非常に感激したんですけど，どう受けとめてよいのかしばらく悩んでいました。それで，その後いろいろ手紙のやりとりをして，それから突然ですが『三つ目のアマンジャク』が送られてきて，これを読んで本当にすごい作品だと思いました。僕は『戦後の日本小説』というような本も出してますけど，戦後に書かれた小説のなかで，いいだももさんも大変な小説書いておられますが（笑），10冊挙げるとしたらこれを入れたいと思います。

いいだ　ありがたい，ありがたい。

西川　すごい作品だと思いました。それで，お会いしたかったんですけど，結局，手紙のやりとりをしていて，最後の方で「死亡通知」みたいな葉書をいただきまして，「もう何日かで死ぬから」という。しかしそれが非常に元気そうな，きれいなしっかりした字で書かれていたので，それはあんまり信じられなかったですね。結局，病院にお訪ねしますという約束をしていた日よりも少し前に亡くなられました。僕はいろいろお手紙いただいていますけども，このお手紙にどう応えたらいいかということにずっと悩んでいたんです。僕も残りすくない余命ですが，この呼びかけに，とにかく応える仕事をやりたいと思っていました。ただ，これは大変な仕事で，そのあと奥様からこれまで書かれて出版されていない原稿のコピーを何千枚も送っていただきました。松下さんの分厚いノートも二十冊ほど。

ともかく，この呼びかけに答えたい。そして，次の世代の人たちに知ってもらい，伝えたい。今日司会をしてくれている今西さんとは長い付き合いで，僕が『フランスの近代とボナパルティズム』を書いたときに当時日本史の院生だった今西さんが書評してくれたのがきっかけで，もう2，30年前のことでしょうか。それから京大農学部の伊藤さんと安岡さん，立命館の先端研の番匠さん，倉本さんのような次の世代の若い人たちが今日ここに来てくれています。

松下さんの文学的なドキュメンタリーではなくて，戦後の農民運動の全体に関わるような研究をしたいと思っていて，関係者の方にひとりひとりにお話を伺いに回るという計画を立てていたところなんですけど，そしたら大金さんのほうから今日このような集まりを計画してくださるということで，たいへんありがたいことでした。どうか今後ともよろしくお願いします。

番匠　立命館大学から来ました番匠健一と申します。私は戦前の青年団の研究をやっておりまして，松下さんの御著書を拝見し，今回の集まりを非常に楽しみにしておりました。よろしくお願いします。

倉本　立命館大学から来た倉本と申します。台湾の現代文学について研究しています。

安岡　いま京都大学の農学研究科で農業の歴史について研究しています。これまでは満州引き揚げの農民たちの研究をしていて，その過程で茨城の農民運動のことを興味を持っておりました。文学に関してはよくわかってないのですけど，京都で研究対象にしているところでは，戦前のプロレタリア文学者で農民運動やってた人がいてます。

山根　私は学部は東京工業大学で，修士から早稲田の方に通っておりました。現在は早稲田で1コマ授業をさせてもらっています。よろしくお願いします。

伊藤　京都大学農学研究科助教の伊藤と申します。安岡くんとおんなじところで農業史をやっています。

今西　ありがとうございました。次に大金さんの方から早稲田の学生運動，全学連の大会の頃，早稲田の共産党の活動について，もう少し詳しくお話しいただけますか。

大金　僕は早稲田の学生運動では主流じゃないんですよ。早稲田の学生運動のなかでは，いわゆる神山分派の系統にありました。早稲田ってのは一番の特色は，東大の全学連のように宮本顕治のもとに直結したガーペー，ゲハイムニス・パルタイが主導権を持っておりまして，全国の学生運動を指導するという形のなかで，われわれの学生運動もいろんな形で展開されたわけ

ですけれども。早稲田の場合には，必ずしも東大全学連の武井くんたちの指導に服さないという連中もいたわけです。武井くんは早稲田と東大は学生運動では車の両輪であると，早稲田があって東大がある，という言い方をするんですけど，われわれは別に東大がなくても早稲田の学生運動はあると考えておりました。それから，なにより1949年に，全学連の内部で早稲田と東大が対立して，早稲田から派遣されていた小稔輝久くんという副委員長，それから早稲田から出ていた書記局の3名が本部に呼ばれて，宮本顕治立会いのもとに査問されて罷免されるという事件がありました。それも含めて，どうも東大と早稲田というのはしっくりとした仲ではなかったように思います。

それから一番衝撃的だったのは，1950年1月冒頭のコミンフォルム批判があって，それまでの方針が大転換することになって，その当時，早稲田の細胞はだいたい細胞員300名くらい，生協含めて500名というふうに，全国の学生のなかでも共産党勢力としては，最大勢力の一つだったと思うんですけれども，そういうなかで50年のコミンフォルム批判にあって，早稲田の細胞は四分五裂っていうんですか，細かく分けると30いくつの分派が生まれたと思います。このコミンフォルム批判のなかで，党の主流派，すなわち徳田派，これを支持するのは非常に少なかったんです。10名前後でしたか，コミンフォルム批判に関する党主流の路線を支持するというのは。これは本当に少数派で，しかも学内ではほとんど影響力を持っていないような連中で，これがひとつでした。

それからやはり国際派のなかでも東大全学連を支持するという勢力は，早稲田の自治会を中心にして，これは吉田嘉清くんたちが中心でしたが，これが一定の階層を握っていました。そのほかに，これも非常に珍しい分派で，志賀義雄さんのいわゆる「志賀意見書」を信奉するグループ，これを「国際共産主義者団」といいますが，これは早稲田の言ってみればクラスに密着して地道な活動をしていた活動分子です。これが「日本共産党国際共産主義者団」。俗称「団」というものですけど，こういう勢力がありました。そういうかたちでさまざまな連中が活動しておりました。

その中で確か5月6日ですか，早稲田も党主流に反対する強圧的な行動が色々あったということで，早稲田の細胞は解散されるわけです。その解散当時の細胞指導部の一員が松下でした。その他に，もう亡くなりましたが，日本共産党の統一戦線部長をやっていた津金佑近，それから僕，あと宇都宮大学の教授になった梅田［欽治］，等々，5～6人ですね。これが解散処分を受けて，それぞれの分派に固まっていきます。松下はその時，国際派全学連，吉田くんたちのグループ，解散反対細胞といったんですが，解散反対細胞のキャップを引き受けて，これは学内での活動をまとめるというよりは，キャップとしての立場から東大全学連と密接にコンタクトしながら運動を進めるものでした。彼は体は小さいし，タンクみたいに丸々と太った元気のいい青年でした。歳は僕の一つ下，学年で言うと彼は遅れて早稲田に来たので2～3年後輩だったわけですけれども，そういう形で活動していました。

そうした国際派の活動というのは，1951年8月の，すべての分派活動を中止しろというモスクワからの勧告があって壊滅状態になります。三々五々さまざまなコースをたどるんです。そんな中で松下は，誰の指示かわかりませんけれども，早稲田での活動を打ち切って，というのはもう早稲田ではそういう活動の余地はまったくないというようなことになっていましたから，

彼は常東農民運動に転身するという道を選んだわけです。一緒に行ったのは安東仁兵衛くんとか，柴山健太郎。早稲田では松下ただ一人でしたね。どうして彼は単独で茨城にいったのか僕もよく分かりません。

松下というのはそういう点では非常にはっきりした男で，安東などはちょくちょく東大など東京に出てきていたようですけど，常東時代の彼の活動は，風の便りで彼の活動ぶりは聞くものの，全然音信はなかったですね。そうしたなか，いわゆるスパイ・オマタ事件ということで東大のリンチ事件があった。早稲田でもそういうことがあったということをほとんど僕ら知りませんでした。その概略がわかったのは，安東くんが例の『日本共産党私記』のなかで，スパイ・オマタ問題についての記述があってはじめてそれを僕らは知ったわけですけれども，松下はそれを知って非常に衝撃を受けたようです。ようするに，リンチ事件の発端を作ったのは俺だということで，非常に自分を責め苛んで，奥さんに言わせると自殺まで考えたそうです。そんなにまで彼は追い詰められていたようです。

これはあとで話してもいいんですけど，そのとき彼は非常な苦しみの中で，早稲田の会合に一切出てきませんでしたね。それから，連絡も自らとりません。僕は気になって折にふれて電話はしましたけれども，非常に元気のいい受け答えがあった。たまたま僕が町田に用があって，「おい，近くまで行くから会わないか」と言ったら，「俺は今，生涯をかけた長編の労作を書いているから，とても時間がない」と言われました。ということで，本当に孤立した生活を送っていたようですね。

最後に本ができる前に，彼を一回見舞いに行きましてね。そのなかで，スパイ問題については自分の考え方をまとめてみろよと，ももさんと二人で話をして，それが便箋2枚くらい，奥さんの筆記でこれが本当の姿，事実であるゆうことで彼のメモが僕らの手に届いた。これがついこの一，二年のことでしたね。僕らはこの事件についてはそれほど深刻なものとしては受け取っていなかったんだけども，東大の連中はいまだにこれにこだわって『一・九会文集』という，6冊まで出た文集のなかで，ほとんどがこの武井によるリンチ事件の研究で占められている訳ですね。

長瀬　文集そのものがあの事件のために作られたようなものですからね。

大金　松下はこれについてもあまりコミットしなかったんですね。僕なんかもお前らそんなに背負うことないという話をして，少しは落ち着いたようですけれども。最後までこの問題について本当の意味での願っているような心境にはなっていなかったんじゃないかという気がします。

とにかくまあ，非常にいいやつだったと思います。けれども，なぜあそこまで一人でそういう問題を背負い込まなければならなかったか，なぜもっと懐を広げて早稲田の昔の連中と胸襟を開かなかったか，無念の思いがします。

ただ彼はあの『三つ目のアマンジャク』を出版して，非常に大きな肩の荷を一つ降ろしたということがあったようで，それに続くいわゆるその『草青火』これはあの，ここに来ている新制作社の池上くんなんかの大変な努力で立派な本ができたんですけれども，この本が出るのに間に合わないで惜しくもその出版の数日前に彼はこの世を去ってしまった，ということがあるんですけれども。彼はこの本の出版を非常に心待ちにしており，早稲田で出版記念会をやろう

かといって非常に楽しみにしていたんです。それが果たせないままに死んでしまったというようなことがありました。今日こういう形で彼を語る会ができたということは彼にとっては非常に喜ばしいことと思って，喜んでいていいんじゃないかと思いますけれども，ざっといえばそんなことを申し上げておりました。

― 早稲田と東大とはちょっと違うとこがあったよね。

柴田 東大って全部旧制高校から来ますよね。旧制高校の派閥って僕らの想像外に凄いんですよね，旧制高校の派閥ってのは。当時東大の細胞のLCが一高の連中だったんですよ。今言った，例の査問の対象になった戸塚がキャップで，上田建二郎（不破哲三），平岡，高沢で，その反対の系列として三高グループというのがいるんですよね。これは力石定一とか，東京経済大学の学長になった富塚文太郎とか，国民経済協会の会長だった竹中一雄，このへんは京大（三高）ですけど，僕は最初この事件が起きた時にこれはやっぱり一高と三高の戦いじゃないかっていう気も正直して，事実そういう面もあるんですよね。いつだか高木くんに会って，「あれは京大と一高の戦いじゃないか。」って言ったら，彼は「何言うか，俺は府立高校だ。東大，一高，三高，目じゃない」と言ったの覚えてますけどね。

そんなことがちょっと事件を複雑にしているんですよね。それと軍関係帰りが多いんですよ。戸塚くんは海兵でしょ。高沢くんは陸士だしね。それから三高の方の，要するに査問をやったのが東大の経済学部の螺旋階段の一番上の五階くらいに空き部屋があったんですよ。そこで査問会議があって，査問をやったのは武井と安東仁兵衛と木村勝造と，いま言った三高グループの力石定一，富塚文太郎，竹中一雄なんかが査問をやったらしいんですがね。

僕もその査問会場を見に行きましたけど，事件当時ね。ここでやったのかと，狭い部屋なんですけどね。結局，分散して全部監禁したんですよ。戸塚くんも監禁して，高沢も監禁して，そしたら戸塚くんが監禁先から遺書を書いて逃亡したんですよね。その監禁している見張り役が家坂哲男くんていうね，これが陸士の出身だっていうことでね，当時武井なんか陸海軍は信用ならないって，陸海軍の出身者はスパイに繋がるということを言っていましたね。というのは戸塚くんと高沢くんが本富士警察所の通訳をやっていましたからね。そういうことも絡んでどうも軍関係は信用できないということもあり，この事件の背景は色々ありましてね。

戸塚君が遺書を書いて逃亡しましてね，それを宮顕さんに見せたんですよ。宮顕さんがそれを読んでね，この遺書を書いたことから見てこれはスパイじゃないって一言があったらしいんですよね。それが結局事件の一つの解決，もう一つはオマタというスパイが，上田と高沢と戸塚と文京区の白山の喫茶店で会ったというんです。その時間がたまたま安東仁兵衛のおふくろさんが日記つけていましてね。その時間に上田さんも我が家へ泊まりに来て，それで現場にいるわけないってアリバイが生じはじめましてね。その二点でこれは犯人ではないな，スパイではないというところが最後結論になったんじゃないかと思うんですが。当時いろんな疑心暗鬼でね，早稲田の吉田嘉清なんかもスパイにされたんですね。あれもスパイじゃないかって僕ら言われましてね。彼は一時期困ってましたよ。早稲田は嘉清がスパイだと言われていました。

大金 だからそれはね大体しか伝わっていないですけど，スパイ・オマタというのは本郷のパールという喫茶店でスパイの会合が行われたと。そこに出て行ったのは戸塚，高沢，上田と，早

稲田からは吉田嘉清と，小稔輝久，あと三枝，の三人だということをはいた。それから傾向のいいっていう奴は誰なのか，傾向のいいのは大金と津金であるということをオマタが吐いたんですね。津金と僕は地区委員会に呼ばれて，査問を受けたという馬鹿げたことがあった。

これがいかにでっち上げかということは，小稔，三枝というような連中は49年には全学連の書記，あるいは副委員長を解任されちゃって，以後運動には参加してない。従って吉田，小稔，三枝ってのは早稲田ではスパイであるという自供ってのが出鱈目だというのははっきりしている。そういう全体の姿が武井のほうには伝わっていない。従って早稲田の国際派細胞に吉田を全学連に引き渡せってね，僕はそんな馬鹿な話はあるかって。もし問題があるならそれは早稲田で解決するべきで，そんな要請には応じるべきでないと。

柴田　ちょうどあれは出隆の東京都知事選の選挙の当時なんですよね。出隆選挙に応援に行ってて，事務所が中野にあって，吉田嘉清くんが来るとみんな白けた顔でね見るんですよ。嘉清さんつらかったですよ，身に覚えないんでね。

今西　共産党がいろんな分派で対立していた事と，このスパイ事件はどう結びつくわけですか。

大金　いやだからね，そのスパイのオマタ問題というのは，僕らはレッドパージ反対運動で除籍処分を受けていているから学籍がなかった。吉田たちは逮捕されて，警察監獄にいた。僕らはそこにいて，まあ学校クビになったから。逮捕されたのが134名くらいいて，保釈金をどうしようかって言うので，新宿にあった和田組マーケットの貸家を借りて，そこで「自由学校」といって，出隆総長というふれこみでね酒の店「自由学校」てのを作った。そこに僕はたむろしていた。そこにしょっちゅう来ていたのが東大哲学科の学生を自称していたオマタ。どうも様子を見ていると非常に怪しい。それで東大に照会をしてみたら，オマタという哲学科の学生はいないと。これは完全にスパイだろうてことを断定して，もう既に死んでしまったけれども志村豊寿という男が早稲田の社研のなかに連れ込んで，そこで査問をしたわけです。

で，査問をしたというのは国際派の連中ではなくて，当時の主流派の新宿地区委員会の地区委員長，それから所感派の地区委員であった小林央，それらが中心になって査問をしてね。しかしその査問の技術はきわめて稚拙で，どこの誰であるとか住所の確認をしないで，そういうスパイであると自認して各方面の名前を挙げたということで，釈放しちゃったのね。いやもう二度とこういうことはしませんと，じゃあもういいやと。そのときに査問に立ち会ったのが畠中稔美くんという，これはたまたま第二学部は細胞が解散されないで，国際派も含めて主流派の細胞のトップだったのね。畠中が査問に立ち会って，畠中は隠れ国際派ということで，その事実の断片を松下に話した。松下はこれは大変だというので，全学連の武井に報告した。

非常に残念なことは，いったいそのスパイ・オマタの自供はどういう意味を持っているのか。あるいは早稲田ではそれはどういう風に受け止められて，どういうふうに処理されたのか，ということについての検討や調査を全くしてないんですよ。オマタの自供そのものを丸呑みにして，もうスパイに間違いないと武井が即断した。これはやはり，非常に軽率なことじゃないかと思う。

これにもう一つ絡んでいる事実はですね，武井は宮顕の命を受けて中国に密航するという風な話があって，そういうことがあってから，一ヶ月ぐらい武井が行方不明。それで武井を喚問して，査問してというような声があってですね。当面の先制攻撃として武井が報復的に，リン

チを含む査問をしたという経過があるんですね。こういうことは，本来であればもっと事をオープンにして，多面的に検討したなかで処理するべき事であるはずなのだけれども，宮本顕治のスパイリンチ事件の戦後版モデルということであった。

柴田　武井がね一時期いなくなったでしょ，あれは当時モスクワでスターリン囲んで徳田，野坂，袴田，西沢隆二が，二回目の分派批判をされたでしょう。会議で武井が僕に「あんな袴田みたいな馬鹿が行ったら絶対負ける」って言うんで，宮顕さんが「それじゃあ武井お前行け」と。それで武井と，東大の経済学の家坂くんと，二人が行くことになって，それで神戸まで行ったんですよ。神戸でずっと一ヶ月くらい待っていたんだけれど，とうとう船がないんですよ。中国行きの船がつかまらなくて。結局もたもたしているうちに例のあれが出てきて，第二回の批判が出てきて東京に引き上げたっていう様な事情があるんですよね。

それから今言ったオマタに関してね。オマタって言うのは結局正体不明なんですよね。僕の個人的な独断なんですがね，結局東大の国際派細胞が完全にあの事件で崩壊したわけですよ。あの崩壊を一番喜んでいるのは誰かと，僕はいつも考えるんですよ。警視庁じゃない。どっかのセクションが，喜ぶセクションがありますよね。代々木ですね。

今西　所感派グループ？

柴田　代々木が一番喜んだんですね。だからオマタってのは，松下くんが最後まで死ぬまで語らなかったというのは，松下くんはなんかその辺のあれを知ってたんじゃないかと，僕は今でも思う。オマタってのは，所感派の繋がった奴じゃないかと。そうじゃない東大なんて詳しく知らないですから，東大の細胞のLC（指導者）が誰かなんて警視庁は知らないですから。そりゃあ所感派のほうが知ってますからね。

いいだ　そらいいこと聞いた。

今西　所感派の国際派潰しの陰謀だったという，可能性はありましたかね。

大金　簡単にね，オマタってのは新宿地区委員会に引き渡した。新宿地区委員長ってのは国民救援会のあとで事務局次長になった飯沼勝男という男です。

長瀬　今日はこの問題のためなんですか？

今西　いやいや，松下さんが何をそんなにスパイ事件でこだわっていたのかを知りたくて聞いているのです。だから国際派東大細胞を潰したというそのスパイ事件を引き起こして，戸塚さんは死ななかったわけですけれど自殺の直前までいったわけですよね。査問事件でそこまで追い込んだわけですよね。そういうことを松下さんは，ものすごく苦にしていたんだなってことは大体お話を伺っていてよくわかってきたんです。

大金　彼は責任すごく感じていましたよ。

今西　死ぬ直前までね。スパイの話はもうそれでいいですけど，リンチ事件っていうのはすごく大きな問題で，私70年に宮本顕治さんとしゃべったことがあるんですが，その時にも彼は私たちが何も聞いていないのに，まず戦前のリンチ事件の話をしていましたからね。「俺は人を殺していない」っていう話を延々としていました。こんなにこだわっているのに，むしろ驚いたことがあるんです。

今西　ちょっと教えてほしいんですが，誰か松下さんが常東農民運動へ行った理由をご存知の

方はおられますか。なぜ常東へ入っていったかと。山口さんの所へ行ったのか。

いいだ　具体的なあれはないけれど，当時の大学細胞で国際派で除名された連中の全体的な流れですね。特別何か個人的なコネがあって行った訳ではないですね。

今西　安仁さんは第一号なんでしょう？

いいだ　そうですそうです。安仁です。安仁と松下というのは本当のぽん友ですからね。

今西　その常東の農民運動のなかで，松下さんはどういう活動をしていたのでしょうか。

来栖　私はその点で見解が違ってしまったんですが。まだ土地闘争ということを中心に考えていたんですね。ところが第二次農地改革が行われてほぼそれが完遂されたという，完全に遂行って言葉が無理があるんですが，おおよそ達成されていって，土地問題ってものは闘争課題にならなくなったわけです。もちろん山林の解放その他等々は残っておりますが，地主が持っている土地を小作人に解放するという仕事については山を越えてしまった。これは事実ですね。

それで安仁くんや松下その他の人々が入ったときには，土地闘争から今度は解放されない山林解放闘争と，もう一つは，これは山口武秀さんの慧眼であったんですが，農産物の価格の引き上げ闘争。もっというならば，僕は武秀さんに評価されたのはこういうところなんですよ，1920年代のネップの問題と同じようなことがありましてね，工業生産物の価格と農業生産物の価格と，その差が顕著になってゆくんですね。それをシェーレ現象って言いますね。工業生産物の価格は上がってゆく，農業生産物の価格はそのまま上がっていかない。従って百姓は一所懸命精を出しても，農業機械を買うと高いものを買わなきゃいかんということで，しからば武秀さんやなんかが農産物，サツマイモの価格を引き上げろ，諸々の価格を引き上げろっていう闘争を，これが一つですよ。

もう一つは税金闘争ですよ。要するに一つは価格であり，一つは税金を負けろという闘争ですから，これはもう，共産党中央の農民部が予想もしなかった，独占資本政府との喧嘩になっていったんですね。その点で常東が全国で一番進んでいたということだと思います。元に返りますけど，安仁くんは高校・大学で彼が後輩ですから，安仁の入党紹介者は，実は僕だったわけですけれども，全学連の中央が代々木から除名されて行き場が無くなった。どうするかというときに，ある人が，常東でやらないかと話をやったときに，安仁くんその他が手を挙げて，じゃ俺も行く俺も行くってことで行った訳で，特別個人の紹介やなんかじゃなかったようですよ。僕が安仁くんに聞いたところでは。あの時は何かこう一つの流れがあったんですね。安東仁兵衛くんとそれから今でも労研でやっている柴山健太郎くんです。

大金　あの，家坂哲男って行かなかったですか。全学連の書記長やってた。彼も常東行ったはずなんですよ。

―　いってない。

―　一時期行ってるんですよ。

来栖　名前はなんて名乗っているんですか。

―　いやそれは知らない，本名は家坂。

―　ペンネームは長谷川すすむです。

今西　関西ですとね，農地改革の直後に地主が小作人に払い下げした土地をね，有償賠償で払い下げたわけですけど，インフレでほとんど値段が安くなっていきます。だけどその土地をま

た地主が取り返すという運動をやったんですけれどね。この土地取上げ反対闘争みたいなものはあまり常東ではやらなかったんですか。

来栖　部分的にはあります。ありますけれども常東は強いですから，そういう地主の動きを粉砕しちゃったんですね。

今西　じゃあ農地委員会は，常東の中では全部小作人側が指導権を取っていたわけですか。

来栖　農地委員会の構成を知っていますか？

今西　ええ，地主代表，自作農代表，小作代表の，三者構成ですね。

来栖　もちろん三者でやりますけれども，常東に関する限りは農民組合側が断然強かった。そういう問題はあまり取り上げないですね。

今西　じゃあ地主の土地取り上げなどはあまりなかったんですね。

来栖　あったけれども粉砕しちゃったんですね。山口天皇強いですからね。

それで大金さんのあれで申し上げたいと思うことは，たいへん松下さんが悩んでおられたと，スパイ事件に。ところがあの東大リンチ査問事件のその当事者連中は，松下さんのことについて恨むとか何とかって問題意識は全然してないですよ。だから松下さんは非常に悩まれたっていうので，僕はお気の毒だったなという感じがしますね。だから真面目だとしか言いようが無いんですが。

それでさっきおっしゃったように戸塚くんが自殺を図ったけれども，死ななかったということですよね。

大金　見張りがいたんですよ。今言った家坂くんというのが見張り。自殺して，結局生き返って，逃げたんですよね。その監禁場所から。家坂くんは見逃したっていうんで武井にいびられてね。お前はやっぱり陸士だからお前もスパイか，とかそういうことを家坂くんに言われましたけれども，実は俺はスパイと言われたって。

来栖　さっきのあれでね，高等学校のあれっていうのは，ほんの短い期間ほんのちょっとなんですけれど，一高出身の人とゾル[6]。ゾルってのは，兵隊。陸士海兵から来た者は軍国主義教育を受けているということ。一高というのはなんといってもトップなわけですから，他の高校から見れば目の敵になる。それからゾルっていうのは軍国主義に反対するため。その一高とゾルの人に対する目の敵にするような動きっていうのは確かにあったんですよ。これはあったけれどもそれはあんまり続きませんでしたね。党自身が，現にごちゃごちゃになっちゃってるんですからね。

元に返りますけれども，東大リンチでした方もされた方も，特にされた方は今でも恨んでますけれども，この松下さんについてなにか含むところがあるとか，恨みに思うところがあるということは，これはありません。その点で僕は松下さんと奥様とあるいはご親族の方々は，そういうご懸念は払拭していただきたいと思いますね。

今西　もう一回農民運動のことなんですが，松下さんと山口武秀さんが対立したっていう。農民運動史の総括でもいいださんがさっき言われましたね。どの点が一番合わないのですか。

いいだ　そりゃあやっぱり官僚主義指導ですよ。山口天皇ですもの。

今西　官僚制批判ですか。いわゆる農民組織の民主主義の問題ですか。

来栖　要するに上から命令するだけですからね。天皇は。

いいだ　それはもうね，渡辺の感性のほうが新しい。

来栖　柴田さんって人もいるんですがね。これは鉾田町の町会議員になって，柴田友秋さんも山口から離れてしまう。独立して鉾田の町から町会議員になってゆく。松下さんは茨城町っていって，あれは茨城県の真ん中辺のいい村ですね。その前の書記長っていうのは，立川光栄，藤枝陸朗，市村一衛，やっぱり山口天皇からみんな離れちゃうんです。偉いんだなぁ山口天皇ってのは。

いいだ　まぁ山口という義兄弟の名誉のために言っておくと彼は確かにそういう欠点はあります。

今西　義兄弟っていうのは山口さんと姻戚関係なんですか？

いいだ　いやいやそれは義の兄弟。それで彼と僕とは熟知だったけれども，彼がそういう体質を持ってたというのは認知されているけれど。彼の名誉のために，晩年にはそこのところは徹底的に彼の中で考えつめたところがあって，農地解放の最大の成果というのは農民が住民になったことだと総括している。彼は，皆そのことはあまり論じないけれども，農民運動の最後の果てのところの彼の結論は，農地解放を通して全部農民は市民になっちゃった，と言っていますよ。だから彼の最後の高浜入干拓反対闘争やなんかは，全部市民として住民としての地域の人々の民主主義ってものに徹底的に座すということで，そこで彼はかの天皇的官僚主義から自分で解放したんですよね。それは彼の名誉のために。

来栖　いいださんの仰るとおりです。市民運動家になりましたね。

いいだ　市民運動家ですよ。だから彼は農民派じゃないですよ，本当最後の晩年には。

今西　山口さんの反独占農民運動理論で，農業経済学者たちが，一柳さんとかね，栗原さんとか入ってきますよね。あれはどういう繋がりなんですか。

いいだ　特に栗原ですよね。栗原百寿と山口のつながりってのは，僕は迂闊にして詰めいていないのだけれども。さっき言った流れからいうと，除名された共産党連中が全部流れとして常東の山口のところへ行くのだけれども，個人の流れじゃないから，媒介者は間違いなく栗原百寿，これが媒介です。栗原の『農業問題入門』てのはいま読んだって，むちゃくちゃ，びっくりするようないいものですよね。

今西　名著ですね。戦後の農業経済学のなかでも最高の名著のひとつだと思いますけどね。

来栖　栗原百寿は茨城県出身ですから。農民理論家でやはり影響力があった方です。

いいだ　あれはもともと栗原が茨城出身者であることから，常東とじかにくっついてましたからね。だから彼が媒介したことによって，東大国際派の安東以下，全部常東にくっついたんですよ。それは松下もなんですよね。

今西　栗原さん自身のご出身大学は東北大ですよね。だから宇野理論の影響を受けていますよね。

いいだ　そう宇野理論ですよ。その辺も面白いところでね，一柳とか，僕の付き合った内藤知周とか，全部それは東北大が多いんですよ。

今西　だから講座派の共産党系マルクス主義理論には割と批判的だったんですよね。

いいだ　全くそうです，全然筋が通らない。

今西　栗原さんは割と謙遜して言っているんですけれど，講座派とは全然あわない訳でしょう。
いいだ　共産党の流れにしても，徳田と伊藤律のようにならざるをえないんですよね。それは「32テーゼ」と日本共産党がどこで繋がるかとかポイントなんですよ。
今西　伊藤律さんは，なんであんなに党内で一気に台頭したのですか，あの若さで。共産党の農業理論の中心になるのですか。
いいだ　やっぱり有能な男で，徳田というのは世間に疎い，戦後時代は伊藤律なしには世間との繋がりがないですからね。それは重用されますよ。目から鼻に抜ける男だから。
来栖　それから伊藤律さんは一高出身で，同期の人が朝日，NHK，その他等々のジャーナリズムのちょうどあの年だから，30代の後半から40にかけて，もっとも働き手になっていて，第一線で大活躍されていますね，新聞記者が。従って第一線で活躍している方からその情報たるや大変なものだったんですよ。それが一高同期の伊藤律のところに来るわけですよ。その点で党の中で伊藤律が一番情報量が豊富であったために，徳田球一は大変重宝がっていたし，また有難がってもいたということは間違いないですね。
いいだ　コミンフォルム批判に伴う党大分裂のときに，徳田，野坂は伊藤律を重宝に使うんだけれども，伊藤律がその時もたらしたGHQが弾圧に出るということで，中央委員会[7]をそこで止めるくらいの威力があった。あの情報自体は非常に正しいんですよね。

その中で情報をキャッチして，それに対してああいう形で対応をするのはまずいけれども，党全体は宮顕を含めてどう対応するかってことを考えなかった党というのはいかがですかね。もう一足で弾圧が来るのは判っているんだから。それを伊藤だけが知っているんだよ。中央委員会へ持ち込んできて，中央委員会をぱっと解散させてというのは，正しいですからね。運用した所感派の側が悪いんで，伊藤律はそこのところは責任ないですよ。非常に貴重な意味をもたらした。

今西　でも山村工作隊とかああいう大失敗もやるわけでしょう。
来栖　あれは伊藤律じゃないですよ。
今西　だけど農業綱領の中心ですよね[8]。
いいだ　それはイデオロギー的錯覚ですよね。
今西　だから山村工作隊運動をやりますよね。それから職場放棄で山村工作に参加しろとか指令を出しますよね。あの方が大きいと思うんですがね。
いいだ　大きい大きい。実害が凄くある。あれは伊藤律理論の実害ですよね。理論が間違うとね，理論軽視の人はそこでいい加減に考えてるけど，理論が間違ったら運動は甚大なる悲劇になりますからね。
今西　でもその山村工作隊に対しては山口さんはどういうふうに考えたんですか。
いいだ　山口さんも絶対反対。一名も出さなかったよ。我々リヤード派はね。
来栖　それでばらしますとね。武秀さんはさっきいいださんが言われた，小河内村山村工作隊は前の時には何十票か取ったのに，やったらたった12票じゃないか。それが7票になり，厳密には何票か…。前の49年1月選挙のときにだいぶ取ったんです。それから山村工作隊で評判を落としたらがくんと票が減ったわけです。それでやはり山村工作隊は駄目だっていう事が証明

されちゃっているわけなんです。

いいだ　その問題評価のときに大事なことはね，つまり朝鮮戦争中だから，党が半非合法の状態にあって朝鮮戦争を反対なり批判するために，おおわらわに半非合法の活動をやってたっていうんだから，そういう時だけに山口武秀だとか僕なんかがとったリヤード派の戦術ってのは，特殊対処すべきあれがあるんですよ。だから伊藤律や徳田にしても，百戦錬磨のコミュニストなんだから，慌てふためいて恐怖したとかそういうことは全くないわけで，それに対処しようとして山村でもって反米闘争をやるっていう，奇妙奇天烈な戦術に走ったわけですね。決してそれは臆したわけじゃないんだ彼は。

今西　だけど武装闘争を具体的に指示したわけですよね。徳田さんもそうですけど。だから武装闘争で犠牲者も出していますよね。

いいだ　武装闘争の根拠は山村にあるっていう。

今西　だから農山村に封建制が残ってるって訳でしょう。

いいだ　そう，東京の後背にね。

今西　そこで戦う方法として…。

いいだ　そう，入っていく。そこで山村重視の（・・・・・）闘争[9]と朝鮮戦争反対の反戦闘争を結合するというね，形でいうとできてる形かもしれないけど。

今西　その犠牲については共産党はちゃんと自己批判していないですよね。

いいだ　全然してないよ。ひどいもんだよ。だって当時はこの早大細胞と東大細胞をあわせて500名あったんですよ。500名いると，その話なんてみんな我々の身近だから聞くと，これはもう大変なものだからね。あんなことしておいて，一言も『80年党史』は書いてないなんてことは信じられないよ。

今西　国際派の人はほとんど山村工作隊に行かなかったんですか。

いいだ　そうでもない。我々茨城は一名もださなかったけれども。自己批判させられたのよ。

柴田　それを条件に。

いいだ　自己批判すると困ったもので，前線行かされんだよね。試されるわけ。だから人一倍頑張っちゃうんだよね。馬鹿馬鹿しい話やスターリン主義ってのは。

来栖　あの大金さんね，いまの小河内村云々では最も活躍したのは由井誓さんですよ。由井誓さんとは同期でいらしたの？

大金　由井は僕が政経学部3年（旧制）だったときに政経学1年です。

―　3，4年後とみたほうがいいね。

大金　年はふたつくらい年下なんです。学年でいうと最上級生と最下位級生です。

いいだ　そのうちインタビューされるときは由井のことは是非加えていただきたい。由井誓は死んじゃったけれど，弟さんは生きて，非常によく一緒にいたことがありますからね。

今西　松下さんは山村工作隊とかそういう闘争ではどうだったんですか。

いいだ　絶対反対。関係ないでしょ。常東派の，リヤード派の事務局長ですからね。だから党中央のグループに疑われるんだ。下山田虎之介なんてのも絶対に反対で，微塵も参加しなかった。だって農民運動を本当にやっている人は，そういうことはいかにインチキな観念論かわかるからね。だから機を急いで自己批判しちゃった，国際派が一番悪いくじを引いたんですよ。国際

派は実際そんなこと信じられなくなくても，小河内で先頭たってやってんだから。

俺なんて細胞で二回査問されたからね。最初は「宮本綱領」[10]に反対したらそれで査問された。こんどは宮顕が広東に行ってて温泉に入ってた間にストライキ破りでやられてさ，なに考えてんだか。帰ってきてから聴濤(きくなみ)[11]弾圧したわけよ。二回目はそのストライキ破り（64年）に反対したことで査問したんだろ。俺は前と後とでは全然正反対違うじゃないかと。お前は一貫して党中央には反対だってことで一貫しているから駄目なんだ，と。まったく，スターリン主義ってのはキリがない。ああいえばこういうだから。自分中心に太陽が回ってるんだから。

今西　松下さんはそれで常東を離れて茨城農民同盟へ行くんですね。で，茨城農民同盟を自分で立ち上げてゆくわけですね。

いいだ　そうですね，常東から離れてね。

今西　それはどういう組織なんですか。もう少し茨城農民同盟の組織の中身を教えてください。

根本　なんて言ったら良いんでしょうね。なべさんが考えたのは農村労働組合というか，そういったものをイメージしていたみたいですね。やっぱり中心は農民の層を独自に組織してくっていうそのことと，それから価格闘争，それと反米闘争ですかね。それを中心にして組織していった。その当時の若い人がみんな集まっていったっていうこともね。

いいだ　茨城という一つの県で，僕はそこで30年やったからよく知っているけれど，前渡基地って米軍の射爆場基地があってね，これだから割合に反米・反基地闘争と農民運動と結びついているんですよ。そういう条件があるから。我々もずいぶんそれは騒ぎましたけど。

今西　要はその，党内党であったという風にさっき言われたんですけれども，そういう農民党的なものを目指す動きもあったんですか。

いいだ　農民党でもないな。やっぱり観念ではプロレタリアートです。

今西　だから基本的な発想は労農同盟でしょう。戦前だったら農民党ってのはあったんですけども。

いいだ　労農同盟です，完全に。だから山口にしても，松下にしても農民党的な発想は全くないですよ。やっぱり労農同盟ですよ。

今西　農民党とか農本主義とは全然関係ないんですね。

いいだ　違う違う，すごく違う。茨城のやつは全総でいま言われているようなのがありますけど，農本主義が非常に強いですよ。

今西　茨城には伝統的な農本主義がありますよね。

いいだ　そうそう，橘ですからね。

今西　橘孝三郎[12]ですよね？

いいだ　僕は橘の牛乳飲んでたから良く知ってます。あの連中は全員農本主義ですよ。しかも農本主義だし非常に不思議な日本的伝統でテロリズムと結びついてるんです。僕はだから小沼とかそういう連中とは非常に親しく行き来していましたからね。彼らの心情も含めて熟知していますけど。彼らは農本主義＋テロリズムですよ。一人一殺ですから。

今西　GHQが来たときに日本で一番悪い村は茨城にあるというふうに思っていますね。茨城の軍団主義を殲滅しなければ日本の封建制は崩れないというふうに，マーク・ゲインが『ニッポン日記』にも書いてる。

いいだ　僕は西部地区の地区委員長てやってて，そのときの共産党なんだけれど。そこで地域で一番勢力があるのは大日本生産党という右翼農本主義なんですよ。これはね茨城独特の問題で，それとの競り合いのなかで我々鍛えられていったんですよ。僕は生産党とは共同講座一緒にやっていたから，しょっちゅう道なんかで，バス通りになったらちょっと落ち着かないとかね，やあさんも多いですから。そういう点では，下へ行っちゃうと左右混交なんですね。左右弁舌やってるんですよ。

今西　橘孝三郎さんってのは，郷土では人気があったんですか。

いいだ　いや人気はないけどね，孤高の人で。あれは俺と同じ東大なんだよ。東大なんだって言うと田舎へ行くと絶対尊敬されるんだよ。それで迂闊に乗るとえらいことになる。だから橘も俺も東大ということになると非常にヘゲモニー力があったんですよ。敬われてたもん。だって町で土地の奥さんなんかに会うと，もう僕なんか東大だけれど向こうの方から最敬礼してくるからね。運動やりやすいって言えばやりやすいんですが。

来栖　あのね橘さんはね，農業階級範疇で言うとね，富農なんですよ。だからご自身もやるし，家族も家の子一同がまず農業生産をちゃんとやって，しかも農業生産上の立派な成績を上げるわけです。従ってその周辺にいる，言葉は悪いが，小作貧農はですね，橘孝三郎先生を尊敬しちゃうわけだ。で単にイデオロギーやなんかで農民動きませんから。現に模範を示しちゃうのね。じゃなんで模範を示せるかというとそれはね，土地がうんとあるからですよ。家族が多くて農業労働力があるから，立派な生産が，ぐんといいものたくさん作るわけだな。それじゃどうしてあれかって言うとね，富農で橘孝三郎ってのはあれ，高等学校は一高ですか？水戸ですか？僕知らないのだけれど。

いいだ　一高です。

来栖　一高，東大組で，それでまたうちへ帰ってきたでしょう。そうするとね，農村で一高東大に倅を出せる農家ってのはそも何ぞや，ってことでわかるでしょう。つまり豊かじゃなかったら，百姓の子どもが天下の東京くんだりや一高に出せませんよ。どんな秀才であってもね。だから橘さんて人は秀才であるけれども，そういう一流学校に入れるだけの実家の経済力もあった。同時に橘さんも立派な方で，その付近の農民に農業上の模範を示しますからね。やっぱり大変支持者がある。

ついでにあの人やっぱり右翼かな。なんかやってる天皇制というかなんか知らないけれども，橘孝三郎一派でまた，あれは五・一五事件時点からですか，すごく軍人とも仲良くなるしね。結論から言うと右翼運動やっちゃうわけだけれども，元に返ればそれだけ皆から支持されていたってことがあるんですな。

西川　茨城のことが中心になって，今日の話にまだ出てこないことで，高知に行って運動されていますね。僕が頂いた手紙ではその高知でのことが教員組合との農民組合の，それこそ労農提携というような話で，大変うまくいって。2ページほどかなり幸せそうな文章でした。そこの話ができたら。

来栖　寺前巌さんの出たとこですか？

いいだ　だから代議士で言えば西岡瑠璃子のところなんだよ。それははじめて聞いた。それは

面白いね。高知の学校長を中心にした運動と言うのは非常にユニークな運動だったから今でも残っていますよ。今でも栗原透と西岡がやっている運動なんですよ。栗原はいま代々木とくっついて，全国革新懇の代表ですから。

— こないだ病気で降りられたって。

西川　ちょっとそこのところ読んでみましょうか。「皮肉なことにその成果は私に最も期待した茨城ではなく，遠く離れた高知県において大きな実を結ぶことになったのでした。高知は日教組の拠点県です。その高知県教組，高教組が労農提携の実現のために私に「ぜひ来てくれ」と要請してきたのです。私は快諾し，勇んで出かけて行きました。それから一ヶ月あまり私は高知の熱心な教員たち，その多くは勤評闘争[13]などで免職その他の処分を受けた人たちです，とともに全県の農村を巡歴し，農民組合を作って回りました。室戸岬から足摺岬まで高知平野の広々とした原っぱから，四国山脈奥地の険阻な山岳に囲まれた山間僻地まで，ほとんど全ての農村で連日連夜農民たちとの語らいや座談会がもたれ，私と教員たちは農民たちとひざを交えて農業のこと，農村のあり方，農民の往くべき道について語り合いました。こうして高知全県に各市町村に次々に農民組合が組織されてゆきました。高知は日本農民運動の強力な拠点県になりました。私にとって深刻な没落凋落が進行する中これはなんとも奇妙にも私の最も華やかな時期となったのです。」ここの文章はいただいたお手紙の中で一番幸せな感じを受けました。

いいだ　光ってるね。今度，栗原と西岡に会ったら聞いてみよう。松下（渡辺）覚えてるかと。そりゃいいこと聞いた。

— いつのことになるのでしょう。ずっと前かな。

いいだ　いやそんな前じゃないですね。

生田　それはいつ頃のことなんですか。

いいだ　教員組合だから，校長会ですからね。勤評の直後ですよそりゃあ。

西川　手紙ではその後60年安保の話になっています。年表にも，高知のことは載ってないですね。

松下静枝　そうですね。これはだいぶ抜けているところがあるので，皆さんにも情報を寄せてもらいたいなと思っています。

今西　高知のことは知っている方この中にはおられないようですから，栗原さんとか高知の方に聞かないとわからないですね。

今西　ちょっと文学のほうに入っていきますけれども，いいださんは紹介者でもあるし，帯も書いておられる。松下さんの文学についてご意見を伺いたいのですが。

いいだ　僕はもう，単純に松下と別れるときは松下は文筆やって死ぬんだと言うから，その最後のところは何としてでも，まとめて本出すために本屋さんを紹介したり，なんかして，最後の紹介のときは紹介した本屋さんは快諾したんだけれど，松下のほうで二冊目だからお金の都合がそれでは折り合わなくて，本屋さんの方でしーちゃんが頑張って，出して，これがまた俺の痛恨なんだけれど，二日違いで本が間に合わなかったんだ。いまわの際に。二冊目はだから彼は見ていないんです。ほんとにもう人生というのは痛恨だね。

松下静枝　あわてもんなんですよ。

いいだ　はは。だからそういうことです。僕自身は文筆家で，松下はある意味では文学青年であるわけだから前歴は持ってるんですけど。それとは遮断したことで関係がないですよ。

今西　では農民運動の体験と『三つ目のアマンジャク』の関係ですが，『三つ目のアマンジャク』は，もっとリアルなものを書かれているのかなと思ったら，ものすごく寓話的な小説ですよね。だからああいう寓話小説に収斂していったというのはどうしてだと思われますか。

いいだ　どなたか西川先生が仰ったのは，全く私小説の風土のなかで生きている人間とは全然違った風土ですよね。だから彼は明らかに自分の生涯の農民運動のエッセンスをそこに盛り込んでいるのだけれど，その盛り込み方はまったく寓話小説的なやり方ですからね。だからそこが彼の文学の最大のメリットだと思いますけどね。あれは私小説だったらまったく下らないんですよね。愚痴に終わっちゃうんだから。しかもなんというか，彼は農民運動の最後のところは僕以上に絶望して死んでいった感じが二つの小説を読むと思うのだけれども，その先に農民にとって何かが出来てくるって展望がまったくないですよね。どこかあの世の方に行っちゃう話ばかりで。

西川　そうですね。その点を今日お集まりいただいた皆さんにも農民・農村，あるいはそういう運動の未来をいまどう考えていらっしゃるのか，ということをお聞きしたいですね。

今西　長瀬さんは，さっき小説の評価ではちょっと厳しいんだとおっしゃっていましたね。

長瀬　ええ，何度かこれは…。まず最初から申し上げますと，あの茨城弁はとっつきづらいですよ。私なんかね，樺太で生まれ育って北海道で暮らして大学から東京，いつかある人が，柳田の民俗についてですね，柳田民俗学っていうのはね，東京の人間と北海道の人間はわからない世界なんだと言った。ということは日本の農村を知らない人間は柳田民俗学と縁遠いということなんですけれども。私なんかまったく縁遠く育って，かねがね日本の農村はよくわからないという意識を持ってきました。たまに行くことがあっても違う世界を見るという。

いいだ　北海道なんてアメリカですからね。

長瀬　はい。私が住んだ十勝なんてところは，普通の人は日本のなかのアメリカと言いますよ。だから私にとってとっつきづらい世界であるということは承知なうえで読み始めますと，あの茨城の言葉が耳にビンビンくるんですよね。皆さんご存知の倉持庄次郎，あの方とも私が話をするようになったのはこの4，5年のことですが，彼と電話で話をしていますとね，あの言葉ですよ。だからこの本を読んでいますとね，倉持さんの言葉が耳にビンビンビンビン来るという感じなわけです。

それで思い出すのは日本文学における地方言葉の問題であって，たとえば井上光晴から長崎言葉を取りはずしたら，あのリアリティは成立しますかね。しないと思うんだけれど，これについてもそう感じましたね。それでもところどころ，これはすごいものになってゆくんじゃないかと，大雑把に見たあと，こんどはこれがあるってことでかなり精読して来たんですけれども，やはりテーマが絞りきれないで，最後で僕は腰砕けになっているという印象を受けました。

いいだ　確かにそういうところがありますね。

長瀬　特にあの与五と武子がどうやら中心的な問題らしいと思って，それに引きずられて読んでいきますと，最後におれメが死んでいきますよね，崖に落ちて。そのあとまだ小説が続くわけです。だいだいおれメで働いてた小説があそこでいっぺん切れて，なお続くということに対

する違和感が出てくるわけですね。それから葬儀に集まっていた村の人たちが，ツンツクテンテンという太鼓の音にですね，みんな死者に返事してゆくという書き方があって，願わくばあそこで終わってくれればまだしもだったんですが。その後なんか太鼓が終わって静かな茨城の農村に戻ってゆくと，何とか由ちゃんの家のお店が開いていた云々という最後のパラグラフがなければまだしもだった，という感じを終わりのところで持ちました。だから，いいださんが言われた私小説と風土と離れるってことはいいのですけれども，私小説にも良さはあるのですから，そこをもうちょっと生かしてですね，与五と武子との関係を掘り下げてもらいたかったという感じです。武子は奥様なんですかね？

いいだ　いやそうでもないですね。

今西　私なんかは割と部落問題とかそういうのやっているので，書きたかった福島の実態は屠殺場問題なんでしょうけれども，ああいう農民のなかにあるどうしようもない差別意識とかね，村の持っている排他性とかが，よく描けています。さっきその日本の農村が理解できないといわれましたが，私は関西生まれでまさに関西の農村に育っていますから，そういう農村の持っている排他的な問題などはうまく表現されていると思います。

いいだ　それは良く書けてますよね。

長瀬　教えられました。この作品に。

今西　農民運動でも入っていった農民運動の人々が，民衆にまた裏切られるような世界とか，そういった民衆たちに自分たちの言っている反独占というのは理論でもまさにうわべだけで，本当に農民の生活に入ってないというようなところでの苦しみがありますね。

いいだ　そこは彼の問題意識で言うと，最後のところは要するにユダの問題ですよね。だから農民運動の指導者のなかには必ずユダ的な性格があるっていうのはわかるのね，農民運動から得た，ひとつの大きなつかまりどころとしては。

西川　活字になっていない原稿を見ても「裏切り」というテーマが一貫して流れていますね。それは何を意味するかなということを今日できたらお聞きしたいと思っていたんですけれども。

いいだ　人々のなかにある裏切りって問題をどのように考えるか，どう処理するかというのは，スターリン主義や反スターリン主義の最大の問題だと思うのだけれど，そこのとこでの松下がずっと生涯苦労して振り絞っていたのは，必ず農民運動の指導者は裏切りの要素を持っているけれども，その裏切りの要素というのは突き立てるべき問題じゃなくて，大衆の進展のなかで自ずからかき消されて解決してゆく道をとるべきものだっていう，そういう選択があるんじゃないかと思うんですよね。

西川　一方で，いただいたお手紙にも何回も出てくる，農民てのはものすごい，理解を超えたどうしようもないものだということですね。それが一方にあって，それとの関わりで裏切りっていうテーマも出てくると思うんですが，それがあまりに強いテーマとして繰り返されるのでどう考えたらいいのかなと思い悩んでいます。

いいだ　それは彼の最大のテーマだね，間違いなく。

長瀬　あの，職業革命家が避け難く負わざるを得ない退廃てなものも出ています。自分にも感じていた。

いいだ　それは当然だと。

今西　テーマとしては，一貫してスパイ事件での同志を密告したことに関する贖罪，罪の意識，運動のなかでの諸問題，自分のやっていることと民衆との間のギャップとか裏切りとかそういう問題を生涯をかけて追求していますね。本日は，長時間有難う御座いました。

注

1）「常東」とは，茨城県内に組織された農民連合であり，この文脈での「茨城」は松下清雄が組織した「茨城農民同盟」である。その後，日本共産党茨城県委員会に入ったから，その意味での「茨城」でもある。

2）早稲田大学の日本共産党細胞のキャップ

3）茨城県古賀市。小島晋治東大名誉教授（来栖の水戸高校東大八期後輩）。東大細胞リンチ事件時，一時不和哲三の身柄は小島の家に預けられた。不和は自己の伝記を出したが，このリンチ事件には一言も触れていない。

4）当時のアメリカ大使

5）菊池重作は，元来社会党代議士で1948年のいわゆる（伊藤律の工作による）「社共合同」によって共産党に入党，優遇するかの茨城県委員長に推され，1950年日本共産党大分裂に嫌気がさして，社会党に戻ったのである―以上二点いいだの思い違い。

6）「ゾル」とは，ドイツ語の“Soldaten”に由来する用語で，「軍人，兵隊」をさす。

7）これは1950年4月の第19回中央委員会総会，第二回9半時に，GHQ弾圧という論題で会議を止めたのである。

8）発言はその通りであろう。しかし今西は1947年第6回大会の農業綱領と1951年10月5全協の党綱領の中の農業問題部分とを分けて考えていない。（伊藤は前者に責任あり，後者に責任はない。）

9）山村をもって都市を包囲し，都市の機能を麻痺させるという中国共産党の革命の戦術。都市の麻痺とは，軍需生産の減少，停止をねらっていたが，もちろん空論でしかなかった。

10）1961年の共産党第8回大会で出された宮本顕一による党綱領「宮本綱領」に対して，いいだは茨城県の常任委員会で反対。いいだは県委員と党を除名される。

11）聴濤克己：朝日新聞出身で産別会議の議長を務めた後，共産党から立候補して衆議院議員を務める。1950年6月レッドパージで公職追放。1964年の4.17ストライキの際の指導で失敗し更迭。日本共産党の元参議院議員，聴濤弘の父親。

12）（旧）一高入学，病気で退学。

13）1957年ごろから激しくなった。

後記

座談会のテープ起こしは，番匠健一が中心になって行ない岩間優希，小川浩史，倉本知明，原祐介に助力をお願いした。また文中の不明な点は，来栖宗孝先生や今西一先生の御教示を仰いだ。最終頁に記した（注）はすべて来栖先生からいただいたものである。当時の状況や個人名に関して，貴重な情報を提供して下さった方々に，御礼申し上げる。

（番匠健一）